言い値で売ってもらった

中国ルート開拓 マスク輸入販売の業者

ドラッグストアなどでマスクの品薄が続く中、中国からの輸入ルートを開拓し、卸売業者を経ずに原価に近い販売を続けている業者がある。雑貨の輸入販売会社「晴和」（埼玉県入間市）は、3月以降、約600万枚のマスクを輸入販売してきた。「言い値で売ってもらう状態」だったという、緊迫した輸入の舞台裏を聞いた。【五十嵐朋子】

前払い100%要求され

同社は3月から、中国の工場から直接マスクを仕入れ始めた。取引先の倉庫管理会社の社長が中国出身だった縁で、現地の工場と接点を持てたことがきっかけだ。最初は大量に輸入する考えはなかったが、周囲でマスクを求める声があまりにも多いため、まとまった量を輸入することに決めたという。

中国では新型コロナウイルスの感染拡大で年明けからマスクの需要が高まり、生産態勢を拡大。仕入れ元はもともと自動車工場だったが、ラインの一部をマスクに変えて増産に取り組んでいた。中国では感染拡大がピークを超えて需要が落ち着き、物流も再開したことから、3月ごろから余剰分が輸出にまわり始めた。

4月下旬、中国から輸入したマスクの箱を確認するスタッフ＝晴和提供

3月以来600万枚 原価に近い価格で

3月中旬に35万枚を輸入しようとしたところ、前払い100%を要求された。同社の営業部長・菊池祐介さんは「普段ならあり得ない条件。中小企業にはリスクが高く、品物が届かなかったりすれば会社が危なかった」と振り返る。マスクの原材料である不織布の値段が上がっていることに加え、世界中がマスクの「奪い合い」をしており、提示された値段は高い。それでも、頭を下げて売ってもらう状態」だったという。

幸い品物が届かないなどのトラブルもなく、これまでに計約600万枚を輸入した。50枚あたり約2500～2600円（税込み）で販売しており、卸売業者を経て街角で販売される輸入マスクより割安だ。インターネットで販売すると入荷前に予約が埋まる状態で、同社は「ほとんど利益は出ないが、マスクを必要としている人たちに貢献できれば」としている。

購入は250枚以上から。通販サイト「VAPONAVI（ヴェポナビ）」で予約を受け付けている。

野球大会、秋の祭り……

今年は中止に

くりくり野球

くりくり少年軟式野球連合会（森田実会長）は10日、都内で正副会長会議を開き、8月18日から3日間の日程でメットライフドーム（埼玉県所沢市）で開催予定だった「第42回くりくり少年野球選手権大会」（毎日新聞社、同連合会主催、スポーツニッポン新聞社など後援）の中止を決定した。1979年にスタートした同大会の中止は初めて。

事務局によると、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、①自治体によっては6月いっぱいは練習自粛など、予選会までの準備期間がない②2学期が8月17日から始まる地域が既にあり、今後も増える可能性がある③感染収束の見通しが立たず、子どもたちの健康管理が難しい――などから中止を決めた。

森田会長は「練習の成果を発揮できる大きな大会を中止にするのは断腸の思いだが、状況に鑑み、関係者には了承してもらいたい」などとコメントした。【遠藤賢二】

「ふくろ祭り」は準備進められず

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、池袋の秋を彩る「ふくろ祭り」の中止が決まった。主催する「ふくろ祭り協議会」が11日発表した。祭りは今年で53回目。9月26、27日と10月10、11日の計4日間を予定していたが、準備を進められない状況が続いていたという。毎日新聞社は例年、特別後援していた。【遠藤拓】

杉並区立小PTA野球

杉並区立小PTA野球連合協議会の春季大会（毎日新聞社後援）は中止が決まった。新型コロナウイルスの感染拡大を防止するため。グラウンドの確保も難航していた。【遠藤拓】

◇都市再生機構（UR）高齢者向け優良賃貸住宅募集（12日）

東京、神奈川の9団地10戸。申し込み本人の年齢が満60歳以上などの資格要件がある。募集案内書の配布は13～26日。申込書を20～26日に郵送、またはサイト（https://sumai.ur-net.go.jp/）で申し込む。抽選は6月11日。問い合わせは東日本賃貸住宅本部募集案内コーナー（0120・411・363）。

〈抽選結果は抽選日当日の午後2時ごろからサイト（https://www.ur-net.go.jp/chintai/）の「お知らせ」欄に掲載される〉

だいあろ～ぐ

――東京彩人記

新型コロナウイルスの感染拡大による緊急事態宣言で、在宅勤務が広がり外出自粛が求められる中、ドメスティックバイオレンス（DV、家庭内の暴力など）への懸念が広がっている。月末までの宣言延長が決まり、外出自粛は続く。DV被害者の支援や加害者の更生に取り組んできた一般社団法人「エープラス」の代表理事、吉祥眞佐緒さんにDVを巡る現状を聞いた。【東海林智】

在宅でDV増 相談も困難

社団法人「エープラス」代表理事 吉祥眞佐緒さん

――この間、DVの相談は増えていますか。

「これはDVになりますか」という問い合わせが増えています。DV防止法で身体的暴力、精神的暴力、性的暴力がDVと規定されています。例えば精神的暴力では身体、生命に対する脅迫が伴わないと暴力に当たらないとされる。けれど、現実の場面では、無視や落ちているゴミを見つけては責める、見下すなどの人格侵害がある。外出自粛や在宅勤務で一緒にいる時間が長くなると、普段は見えづらいそういう問題が噴き出してくるのだと思う。

――具体的には？

ある相談では、妻が夫から「マスクを買ってこい」と命じられる。何時間も探すが入手できない。すると「そんなこともできないのか」と延々責められる。

別の相談では、夫婦共働きで、2人とも在宅ワーク。夫が部屋の一番いい場所に陣取り、1台しかないパソコンを独占して仕事をする。妻は、夫が寝た夜中に仕事をしている。子供が泣けば「仕事中だ、黙らせろ」と怒鳴られる。昼時は、ダイニングテーブルにどかっと座り、昼食が出てくるのをただ待っているだけ。

――切実なケースが増えているのですか。

深刻な事例は増えていると思うのですが、相談できない状態になっていると見ています。在宅ワークで常に一緒にいて、深刻なDVを受けている。でも、そばに相手がいるから相談の電話をかけることができない。DV相談を含む「何でも相談会」をやった時、朝から雨が降っていて、その時は相談電話はなかった。ところが、午後3時ごろ、雨が上がると、4台あった電話がDV相談で埋まってしまった。雨が上がり、パートナーが外出した隙を狙っていたんですね。LINEでの相談を受け始めると、件数は急増しています。

――相談できないと大変ですね。

だから、工夫しました。団体でマスクをなんとか確保して、相談者に渡せるようにしました。相談者は「マスクを探す」と外出してもらい、相談してマスクを持って帰ってもらう。怪しまれず相談ができます。

――DVが行われる背景には何があるのでしょうか。また、対応策は？

元々パートナーを見下しているのが、コロナの影響でDVが強化されている。男性は「収入が減ったり、在宅勤務をしたりで俺は大変だ。そんな中だけど大黒柱として一家を指導しなければ……」となり、述べてきたような対応を取り、パートナーを傷つける。けれどそれがDVだと分かっていない。

この際、夫婦関係が対等なものかどうかお互いが見直すことが大事です。家に一緒にいるわけですから、家事分担も含めて、人間と人間が共に暮らすことを考えてほしいです。

被害に遭ったら、遠慮なく相談して、もつれた糸をほぐす。場合によっては逃げることも必要です。

よしざき・まさお　2006年に、DV被害に悩む女性を自立までサポートする一般社団法人「エープラス」を設立、代表理事を務める。5人の子を育てたシングルマザー。問い合わせはjoseisoudan@gmail.com

記者の一言

「子供の前で夫婦がけんかしてしまったら、仲直りするところまで見せて」。取材の最後に吉祥さんが漏らした。小さい頃、親のけんかで必死に仲を取りなしていた自分を思い出した。親のけんかを見せるのは児童虐待だと改めて思った。